

Harvard Medical School Exchange Clerkship Program: Beth Israel Deaconess Medical Center “Advanced Study in Neurology”

2015年1月5日から2月6日までハーバードの関連病院である Beth Israel Deaconess Hospital で実習しました。

●渡米まで

いずれ医師として米国に臨床留学したいと考えており、学生のうちに米国の医療現場をみたいと思っていました。USMLE は取得していなかったのですが、USMLE を取得していなくても参加型の実習をできるところに行きたかったので、Harvard Medical School (以下 HMS) に応募しました。

手続きに関しては、国際交流室の学内選考面接、HMS Exchange Clerkship Program の HP でのオンライン登録、電話面接、郵送で書類提出、合格通知のメール受信、という流れです。オンライン登録時に希望のコースを 10 個以上登録することができます。希望の診療科、および実習を行う病院などを考えて登録しました。私は脳外科、神経内科、救急科などを中心に登録しました。

電話面接では、英語でのコミュニケーションに問題がないかを確認するような簡単な質問をされました。今まで東大の実習でどのようなことをしていたのか、登録したコースに関してなぜそれを希望したか、などといったことを聞かれ、2分程度で終わりました。電話を切る前に、”Your English is excellent. You may apply to HMS Exchange Clerkship Program. Please make sure to send in all the necessary documents by –.“と言われました。

その後、大学の成績証明書や推薦状、抗体検査の結果や TOEFL の点数などを示すさまざまな書類を郵送で送りました。必要記入事項はすべて記入していたのですが、郵送後に先方から連絡が来て、抗体検査の陽性・陰性だけではなく、抗体陽性とみならず抗体価の range を示した上で送りなおすように、と言われ、度々保健センターに足を運んで書類を FAX で送ることになりました。検査の証明書のみではなく、実際の抗体検査の結果用紙も送ることをお勧めします。

書類審査が終わって受け入れが決定すると、どのコースに配属されることになったかの通知のメールが来ます。通知の時期は応募者によって違うようですが、私の場合最終的な合格通知は 11 月下旬に来ました。

受け入れが決定してから実習開始まで 1 か月半ほどしかなかったもので、急いで航空券をとったり、宿泊先を探したりしました。ボストンの宿泊は非常に高価なのですが、幸い私の実習先から徒歩 15 分程度のところにある B&B に適当な値段な宿泊先を見つけ、そこに泊まることになりました。アメリカの病院は朝の集合時間が早いので、病院近くに宿泊先を見つけることをお勧めします。

アメリカでの実習の準備としては、エレクラで海外に行くことになった同級生たちで集まり、USMLE step2 の教科書を使って英語で診察したりカルテを書く練習をしたりしていました。

●HMS での実習内容

Beth Israel Deaconess Medical Center (以下 BIDMC) の Advanced Study in Neurology で 4 週間実習することになりました。日本でいう神経内科ですが、アメリカでは Neurology は内科・外科の枠とは別のものであるという位置づけで、独自の研修システムも持っていました。Neuro の病棟には stroke, general, consult の 3 つのチームがあり、各チームにそのチームの内容を専門とした Attending と Fellow が数人ずつ、Resident が 3 人ずついました。Resident は、全員 Neurology の専門研修医ですが、Neuro の病棟、ICU、小児科などを数か月ずつローテーションしています。病棟では、各チームに 4 年目研修医である Chief Resident が 1 人と、Junior Resident が 2 人所属していました。ハーバードの医学生もポリクリで 4 週間 Neuro を回るようになっており、私と同時期に 4 人の学生が実習していました。私含め学生 5 人で、2 週間ずつどのチームを回るか決め、私は最初の 2 週間は stroke、次の 2 週間は general に所属することにしました。

実習内容としては、Neuro を回っていたハーバードの学生 4 人と全く同じように行っていました。朝 7:00 から Chief Resident、Junior Resident、学生でチームの患者さんの回診をするのですが、研修医たちが病院に着く前に学生が病棟に行き、過去 24 時間の患者のバイタルの推移を確認するのが HMS の学生の習慣のようです。3 時間ごとに看護師たちが患者全員のバイタルをとって紙カルテに記載しているため、回診前に過去 24 時間の推移を朝回診の記録用紙に予め記入しておくのは学生の仕事です。また自分の担当患者が常に 2, 3 人ずつ割り当てられているので、その患者のカルテ診を行い、Chief Resident に回診中に患者の部屋の外で簡単にプレゼンできるよう、準備します。研修医たちが到着すると患者を回診し、9:30 からは実際の患者さんに参加していただくケース・カンファ、神経病理カンファ、神経画像カンファ、グランド・ラウンドなどに出席し、10:30 からは所属チームの Attending とのカンファになります。Junior Resident または学生が担当患者について Attending にむけてプレゼンし、行うべき検査や治療方針の提案をします。Attending、Chief Resident、Junior Resident と学生でチームの全患者の診療方針について 12:00 頃までディスカッションします。Lunch time にもさまざまな教育的なカンファが開催されていました。午後は Attending とのディスカッションで話した内容などをカルテに記載したり、そこで出された課題について論



▲Beth Israel Deaconess
Medical Center

文を検索して調べたり、新しく入院してくる患者の診察をしにいたり、退院サマリーを作成したり、とさまざまな業務を行いました。上級医や **Chief Resident** が学生向けの講義をしてくれることもありました。

学生もすべての患者のカルテに自由にアクセスして記載することができるので、担当患者のカルテ記載や入院・退院サマリー作成など多くのことを任せていただきました。カルテやサマリーを記載した後は、**Resident** が目を通し、**co-sign** して、フィードバックしてくれました。自分の書いた文章をそのまま正式なカルテに利用してもらえるので、非常にやりがいがありました。

また、4日に1回のサイクルで、学生も **on call** のシフトがありました。**On call** のシフトは、平日は夜 20 時まで、週末だと朝 7 時から夜 20 時までで、**on call** の **Junior Resident** と一緒に病棟で待機し、コンサルトがあるとそれに対応しました。コンサルト症例については学生だけでまず患者を診察しに行き、その結果を上級医にプレゼンし、診療方針をディスカッションします。**On call** 中は人手不足なので、通常の所属チームに関わらず、新入院患者を受け持ったり、コンサルト症例を担当したりすることができ、とても勉強になりました。

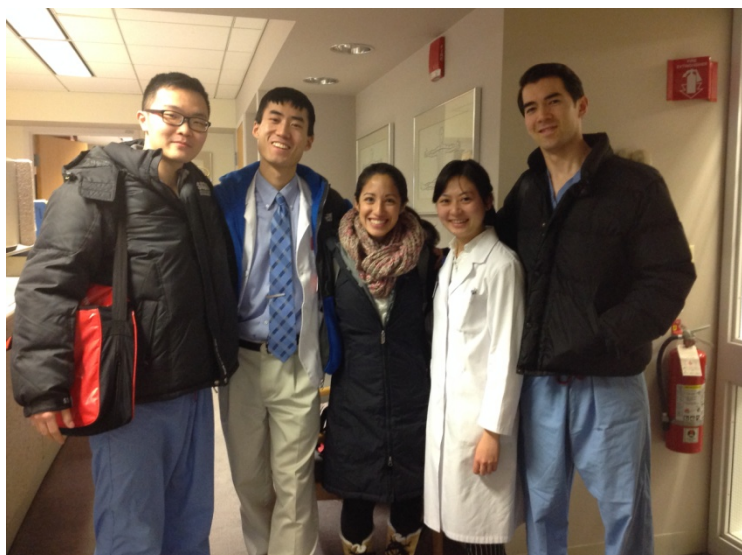
アメリカは医療費の問題もあり、**BIDMC** のような急性期の病院では、平均入院日数は非常に短く、**Neuro** のほとんどの患者も入院から 1 週間以内には退院もしくはリハビリ病院へ転院していきます。そのため、私も一週間あたり 5, 6 人も新しい患者を受け持つことになり、入院時診察も頻繁に行うことができました。**Stroke** チームでは、**ER** に脳卒中疑いの患者が来たという連絡があると、**ER** に診察しに行き、必要な検査をオーダーして、鑑別をします。脳卒中患者は多様な神経症状を示し、2 週間の間に 10 人以上もの患者を担当したので、神経所見から脳の疾患部位を推定するよいトレーニングになりました。**General** チームでは、てんかん患者の終夜脳波のための検査入院のほか、**ALS**、**SCA-3**、**CJD**、初発痙攣の鑑別で発見された脳腫瘍患者などを受け持ちました。過去の **gun-shot-wound** のために下半身不随である患者や、**IV drug user** で心内膜炎になり、脳梗塞になった 20 代女性、救急車で来院して治療を行ったが、違法入国者であったため退院手続きが非常に複雑化した患者など、日本で実習しているとみかけないような患者も多く、アメリカ社会の現実も垣間見ることができました。

4 週間の正規のプログラムを終えたあと、1 週間 **BIDMC** の **neuro-oncology**、**neurosurgery** で実習させていただきました。**BIDMC** での実習が決まったあとに、東大の脳外科の先生のご紹介であらかじめ **neuro-oncology** と **neurosurgery** にご連絡させていただいていたので、カンファに出席したり、外来の新患の間診と診察を行ってカルテにまとめて **Attending** にプレゼンしたり、手術を見学させていただいたりすることができました。**BIDMC** では **GBM** に対して **novotTF** という新たに **FDA** で承認されたばかりの治療を行っています。日本ではまだ認可されていないので見学したい、と思っていたので、**novotTF** 治療対象となる

患者さんを担当させていただきました。いろいろと融通をきかせてくださった先生がたに感謝しております。

●その他

On call のシフトの入っていなかった週末にはボストン市内を観光したり、ニューヨークへ一泊旅行へ出かけたりもしていました。小学生の頃にアメリカに住んでいたことがあったので、ボストンにもニューヨークにも、友人や知り合いの家族がいて、嬉しい再開をはたすことができました。実習終了後の週末の夜には、Neuro を回っていたほかの学生や研修医と一緒に Attending の家の dinner party に行ったり、ボストンに留学中の日本人医師の先生がたの home party にもよんでいただいたりして、尊敬する多くの先生がたにお会いすることができました。アメリカでたくさんの貴重な体験をさせていただき、アメリカにまたいつか戻ってきたいという気持ちが強まると同時に、改めて日本の良さも再認識することのできた 5 週間でした。この留学を支えてくださった東大の先生がた、ボストンでお会いした先生がたに感謝いたします。



▲一緒に Neurology を回ったハーバードの学生たちと